令和３年度秋田県放課後児童支援員認定資格研修　研修レポート抜粋

（誤字脱字等については校正しているため、原文と異なる場合があります）

県北会場

科目　⑤児童期（６歳～１２歳）の生活と発達

◆　１・２年生に対しては例えを使うなどして具体的に伝える必要があり、３年生以上になると抽象的試行ができることがわかりました。学童期の子どもたちに対しては才能を発見し励まし、適切な指導をすることによって、困難な課題を解決できず自分の能力に失望し劣等感を抱くことのないよう、近くにいる存在として支援してあげたいと思いました。学年ごとの特徴を学ぶことで、その年齢にあった対応が必要になると改めて感じました。

◆　１・２年生が通う放課後児童クラブに勤務しています。低学年は幼児期と学童期の切り替えの時期で、言葉や思考が幼児期の特徴に近く、自分中心に物事を考え、言葉だけでは理解できないため、必要に応じて大人の柔軟な支援が求められます。発達段階ごとの課題を学んだことで心の特徴や問題の意味を理解することができました。これを踏まえ、今後の関わり方や適切な対応方法を模索していきたいと思います。

◆　児童期には発達段階があり、段階によってできること、できないこと、特性を知ることで、実際の現場で起こるトラブルへの対応の参考になりました。特に、低学年の子どもたちは自己中心的に物事をとらえるということで、何か伝えたいときには目に見える物を使い、具体的に一つ一つ丁寧に説明していくことが大切だと知り、実践していきたいと思いました。子どもをひとくくりにせず、一人ひとりに寄り添った支援をしていきたいです。

◆　エリクソンの「人間は生涯に渡り発達し続ける」という言葉が心に残りました。人間は生まれてから死ぬまで色々な意味で発達しています。子どもたちもそれぞれの時期に応じた発達があり、どの領域においても著しく変化しています。その特徴を理解しつつ、一人ひとりの良さを見つめ、社会に適応するために、成長する過程で適切に支援していけるよう、継続的に学習することが大切だと思いました。

◆　学童期の特徴を学びました。低学年は言葉や思考が幼児期に近いため、対応として具体的な物を使い目の前で説明する。中学年は集団生活が中心で個人差が目立ってくるので、良いところをほめて認めてグループ活動で役割を与える。高学年は青年期の入り口で、基本は子どもに任せる。でも、「困ったときには聞いてね」と隙を作る。それぞれの年齢の児童がいて対応や声掛けに悩むことがあったので、今後の仕事に活かしたいと思います。